

広報 Koko Gallery  
展示室

第30回

企画展

「美人花くらべ— 風俗画家 尾形月耕の世界」

日本美術が好きな方でさえ「尾形といったら光琳じゃないの?」とおっしゃるかもしれません。光琳でも（あるいは乾山）でもなく、明治時代の画家尾形月耕（1859-1920）の名を知る人はどれほどいるのでしょうか。彼は本の表紙や雑誌『風俗画報』などの挿絵、錦絵を多数手掛けるなど当人気を得ながらも、明治期の「美術」・「版画」変革期の影に隠れ埋もれてしまった画家といえます。

しかし、月耕とほぼ同じ時代に生き、当館収蔵品を収集した青木藤作氏（1870-1946）は、彼の錦絵をたくさん収集しています。今回はそのなかの一幅をご紹介します。

堀切村（現東京都葛飾区）にあった小高園は、園内に植えられた花菖蒲を見に多くの遊客が訪れる庭園でした。江戸時代から人気があり広重も描いた花の名所を舞台として、月耕は情感漂う画面を創りだしています。

東屋から娘がひそやかに見つめる先には、園内に設けられた座敷でくつろぐ男の姿があります。声をかけることもできず、想いを寄せる相手をただ見つめるだけの娘の横顔が愛らしく活写されています（花菖蒲の横に立てかけられた2本の洋傘が明治という時代を感じさせます



尾形月耕「花美人名所合 堀切の菖蒲」大判三枚続  
明治29年（1896）当館蔵

ね）。娘には、その隣に腰掛けた婦人の他にも何人が連れがいます。すだれのすぐ後ろには娘を指さす女性が。「アレ、ごらんヨ、見てるだけかい。かあいいねえ」とでもからかっているのでしょうか。ちらりと見えた落ち着いた色調の着物から彼女が妙齢の女性であることがわかります。経験豊富な彼女からみれば、ほほえましいばかりの淡い恋。月耕ならではの柔らかな筆致と色彩が、そうした主題にふさわしい雰囲気を出しています。

※尾形光琳…江戸時代初期の絵師。装飾的な作風が後世に大きな影響を与えた。代表作に「燕子花図屏風」「紅白梅図屏風」など。乾山は光琳の弟。絵師、陶工として兄同様に活躍した。

※この作品は4月13日（日）まで開催の企画展「美人花くらべ—風俗画家尾形月耕の世界—」に出品されています。

那珂川町馬頭広重美術館学芸員 津田卓子

冬の押し花

自然に咲いている山野草を押し花にして、楽しんでいる栗田知恵子さん。

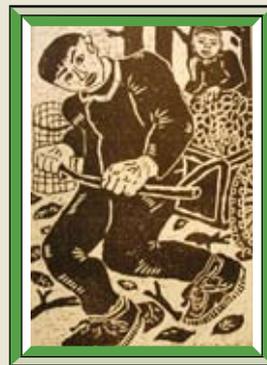
興味のある方は、ぜひ「栗田押し花教室」（健武）まで ☎0287-92-4152

雪景色

栗田知恵子さん（健武）



ミニ  
ギャラリー



第3回那珂川町学生版画コンクール町長賞  
受賞作品「リヤカーをひくぼく」  
露久保湧輝さん（大内）